イマージョン教育とは

―群馬国際アカデミーで考える―

開倫塾
塾長　　林　明夫

Q：群馬国際アカデミーを訪問したそうですね。何回目ですか。

A：(林明夫：以下省略)私の住む栃木県足利市に隣接する群馬県太田市にあるイマージョン教育で有名なGKA、群馬国際アカデミーには、今回を含め3回訪問させて頂きました。1回目は東京都教育委員で漢字検定協会の高坂節三理事長と、2 回目は足利市の大豆生田実市長と、3 回目の今回は私が会長をつとめる足利市経済活性化諮問会議の委員の皆様とともに視察・訪問させて頂きました。

漢字検定協会理事長の高坂先生とご一緒させて頂いたときには、太田市役所で GKA の理事長もおつとめの清水聖義太田市長から、設立の趣旨と経緯をお聞きしました。グローバル化する社会で活躍できる人材を育成するには、従来型の学校にはない大半の教科を英語で教育する必要があるとの強い信念から GKA を 2005 年に開校し、8 年目を迎えた現在は小学校 1 年生から高校 2 年生まで 800 名以上が在籍しているようです。

Q：イマージョン教育とは何ですか。

A：多くの教科を英語で教育する教育です。GKA では国語と社会科以外は英語で教えていますので、日本では数少ない本格的なイマージョン教育の学校であると私は考えます。

Q：イマージョン教育はなぜ必要なのですか。

A：私の例を出して恐縮ですが、私は割と英語が好きで、自分ではいくらか英語を勉強したつもりでいました。1998 年春にアメリカのワシントン D.C.にあるブルッキングス研究所で 1 週間のセミナーに参加し、同年秋に同じワシントン D.C.にある世界銀行研究所で 3 週間の民営化等の短期集中コースに参加、縁を得て、翌年 1999 年にはハーバード大学行政大学院国際開発研究所で 3 週間の民営化集中コースを履修しました。また、2002 年にはシンガポール大学行政大学院で 2 週間の民営化コースを履修しました。すべてのプログラムは、私にとっては機関銃のような速さで語られる英語で行われ、膨大な量の参考文献に基づいて議論が展開されたため、何が議論されているかを知ることで精一杯で、議論に加わることが困難な場合が多かったのが現実でした。

学生時代にあんなに熱心に英語の学習をし、テストの成績もそれほど悪くはなかったのに、なぜこんなにも理解できないことが多いのだろうと、アメリカやシンガポールで学ぶ間に何回か考えました。そこで得た結論は、私自身は小学校、中学校、高校、大学での教育の大半を日本語で受け、日本語での知識を得て学力が身についているが、英語で各教科の教育を受けたのではないから、英語での知識が欠けて学力が身についていない。これが私がブルッキングス研究所や世界

銀行研究所、ハーバード大学行政大学院、シンガポール大学行政大学院のプログラムの内容が十分に理解できなかった理由だ、このような考えを持つに至りました。

多くの教科を第一言語、国語である日本語だけでなく、英語のような第二言語で教育するイマージョン教育の必要性を、私は 10 数年前に自分の体験を通して痛感しました。

加藤学園や GKA のような小学校段階からイマージョン教育を展開する学校が日本国のすべての市町村に少なくとも 1 つずつ存在してはじめて、日本は世界の国々と交流できるものと考えます。

Q：イマージョン教育に関して、学習塾・予備校・私立学校の経営者・経営幹部の先生方にお伝えしたいことはありますか。

A：私が経営する開倫塾でもそろそろ挑戦したいのですが、1 つ提案があります。

近くの大学や大学院で学ぶ留学生を講師として採用し、小学校や中学校、高校の各教科の内容を英語で授業するコース・カリキュラムを設計して実際にやってみてはどうでしょうか。

各教科の英語のテキストは、従来と比べ入手し易くなりました。例えば、小学校低学年から高校 1 ～ 2 年生レベルまでを、短期集中でもよいからすべて英語で教える。算数・数学からスタートし、高校 1 ～ 2 年生レベルの数学や理科も英語で教える。社会や音楽、美術、保健・体育、技術・家庭も英語で教える。

週末や放課後、休日などを活用して、学習塾・予備校・私立学校ならではのイマージョン教育を実際に行うことで、この日本の閉塞感を打ち破ろうではありませんか。

Q：最後に一言どうぞ。

A：GKA の学習成果はどうかといえば、極めて高いと私は考えます。中学生以上は毎年 TOEIC を受験し、その結果は 500 点以上と、大学生や大学院生の平均点より高いようです。

この教育の成果は、理事長、校長、スタッフの先生方ががっちりとスクラムを組み、グローバル人材の育成という方向にベクトルを合わせ、教師としての力量向上に励み、また、生徒も自覚を持って学習に励んでいる結果と考えます。太田市のブランドイメージも GKA の評判がよいために著しく向上、入学のために住所を移す方も出ているようです。

最後になりましたが、今月も皆様の参考になる本をご紹介させて頂きます。苦悩の歴史を踏まえた上で、絶えざる挑戦をし続ける欧州から学ぶことを痛感している方々とともに読むべき 3 冊です。ヘールト・マック著、長山さき訳「ヨーロッパの 100 年－何が起き、何が起きなかったのか(上・下)」徳間書店 2009 年 6 月 30 日刊、脇阪紀行著「欧州のエネルギーシフト」岩波新書 2012 年 6 月 20 日刊、佐々木雅幸著「創造都市への挑戦－産業と文化の息づく街へ－」岩波現代文庫、2012 年 5 月 16 日刊です。

現代の世界における日本の果たすべき役割とは何かを考えるのに最適の 3 冊と確信いたします。是非、御一読を。